

食生活の構造に関する研究

— 食習慣の伝承について —

黒澤美智子・小西亜季

Studies on the Construction and Overall Character of Dietary Life — The Tradition of Eating Habits, Manners and Custom —

Michiko KUROSAWA and Aki KONISHI

There has recently (Showa) been increased domestic expectation with regard to the tradition of manners and customs.

This paper focused attention on health, and encouraged researcher to purpose study on this topic (Heisei year the 1st and Heisei years the 22th).

This paper is not just a properties paper, but the students and mothers.

The appearance at this time of the paper presenting the properties and value of research is very significant.

The purpose of this paper is to present knowledge, and to introduce properties which could be applied with in the health science.

The paper is warmly commended to all with an interest in domestic science and not only to those engaged in health science, in the hope that it might contribute to the those of domestic life.

Domestic science can be expected to find application in a very wide variety of field, including the family, life and foods.

Domestic science can be expected with in a food science or life science, by means of understanding the phenomenon or function to serve the welfare of mankind. The paper consider the link between Japanese cultur, year's celebration and ages.

We would like to express our thanks to the mothers and students of the projects of investigation. We would also like to express our deep appreciation to all domestic home and families or supported our projects.

キーワード：慣習 custom, 伝承 tradition, 家族構成 family structure,
家政学 domestic science

I. はじめに

本研究は、平成元年に行った食生活と家庭生活習慣の伝承に関する研究（本学名誉教授・松岡明子先生、本学元非常勤講師・鷺見美智子先

生と黒澤の三人共同研究で第5次韓・日家政学シンポジウムにて発表）の基礎調査の一部を土台にしたものである。我々食生活教育に関わる者は昭和時代の終わり頃から日本の家庭生活における「食の伝承」に関する懸念を強く感じて

いたのである。本調査結果も予想どおりに厳しいものであった。

しかし「食習慣の伝承」は、今日一層、学生やその家族に対して意識して実施してもらいたいと願う気持ちから本報は平成22年に著者らが再度調査を試みた結果である。すなわち本学学生及び母親に対して行った調査結果を当時の状況と比較したものである。また本報はその後の日本の食生活が、その善し悪しに関わらずそれなりに安定した状況を少し垣間見ることができると考え、行った再調査でもある。集計を試みたので、その一部をここに報告する。

II. 調査方法

1. 調査対象および調査年次

調査対象者は女子学生の母親と娘本人である。
平成元年（1989年）の調査：A群（20年前）
平成22年（2010年）の調査：B群（現在）

2. 家族構成の内訳

表1に示すようにAとBに大差はないが現在益々核家族形態が多くなっている事は予測通りである。有効回答率は98%であった。

表1 調査対象者の家族構成

家族構成	A群:20年前	B群:現在
祖父母と同居	5	3
祖母と同居	8	5
核家族	18	19
合計	31人	27人

3. 調査の形式

学生に調査用紙を配布し、母親と学生本人により留置記入方法で回答された用紙を回収した。

III. 調査内容および集計結果

1. 母親に対して「食生活の伝承をどのように考えているか」という質問を行った結果は図1に示したとおりである。

「我が家の味を伝えたい」と考える母親は

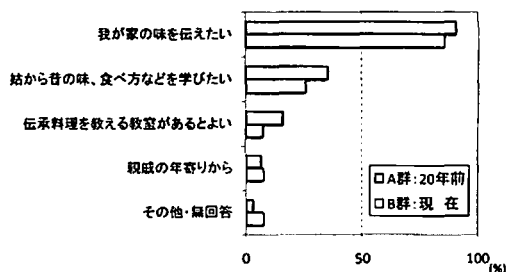


図1 食生活の伝承について、どの様に考えているか

いずれも85%以上を占めているにも関わらず、その方法は現実性に乏しく「姑から昔の味や食べ方を学びたい」という気持ちは薄い。20年前であっても僅か35.5%であり、現在の母親の場合は更に減少し25.9%である。また「親戚の年寄りから学びたい」と考える母親もわずかである。20年前の母親世代は「伝承料理を教授する教室を求めていた」事実があった。しかし今回は家族員の関わり方を見ると、その変容を感じさせられた。

そこで、これらの結果を家族構成別にさらに解析することとした。

2. 20年前も現在も「我が家の味を伝えたい」という回答割合が極めて大きいことから、どのように伝えたいのか、その方法について質問した。その結果を図2に示した。すなわち図1の結果をさらに家族構成別に集計するこ

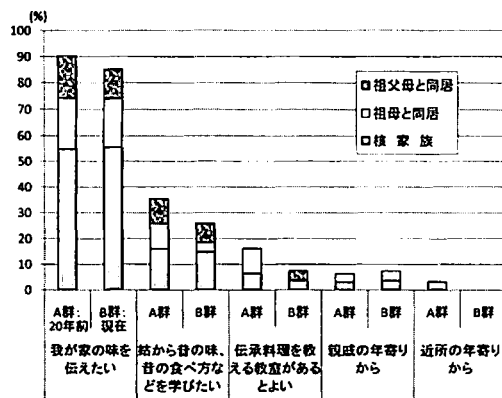


図2 家族構成別、食生活の伝承をどう学び伝えたいか

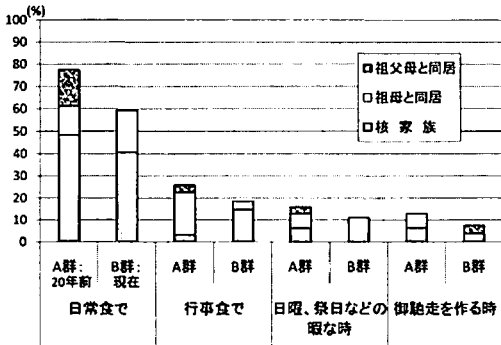


図3 我が家の味をどのような方法で伝えたいか

とを試みたのである。

図2を見ると、核家族の母親の方が殆どの問いに対して三世大家族より回答率が高いことが分かる。即ち同居をしていない姑から昔の味や昔の食べ方を学びたい・伝えたいと考えている事を想わせる結果である。また、現在に至っては、例えば娘にとっての祖父母と同居している母親であっても「伝承料理を教える教室があると良い」と言う回答も少数であるが発見される。

一方、図3には「我が家の味をどのような方法で伝えたいのか」と言う問いに対する結果を示した。

20年前も現在も日常食や行事食において伝えたいと考える傾向が強い。日常食においては必然的に子に伝わっていくはずである。又一方では「行事食や、ご馳走を作る時に伝えたい」と回答していること、は母親として普

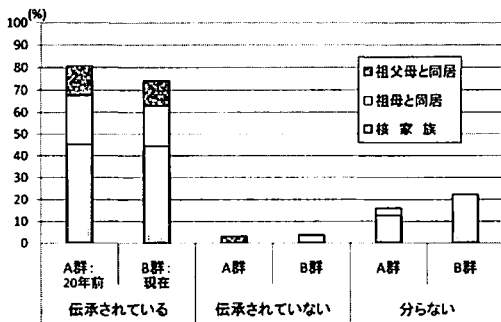


図4 あなたの生活で、食生活が伝承されているか

段から伝承を意識しているからであることは十分理解できる。しかしながら、これは娘をもつ母親の回答である。もし男子だけを育てている母親に対して同じ質問をしたならば、同じ回答が戻ってくるか否か、今回は不明である。従って、ここまでで止めることとする。

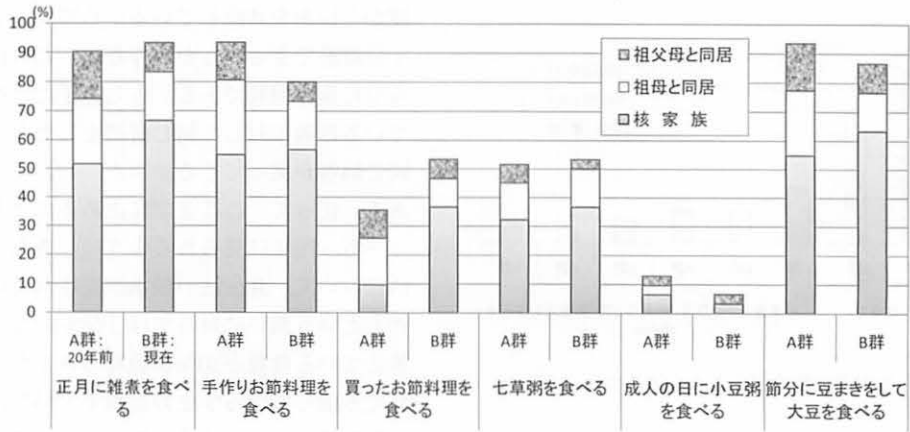
一方、図4に見られるように「あなたの生活において、食生活の伝承が成されていますか」という問いに対しては「分からない」と答えている母親が20%前後見られるが、核家族で生活している学生の母親でも45%は「伝承されている」と認識しているのである。反面、三世代構造で生活をしている学生の母親の場合は合計30~35%で、実際には少ない事が分かる。

すなわち姑と同居している場合は、母親本人の実家から受け継いでいる食習慣と現在の実生活との間で矛盾が生じていることも少なくないはずである。すなわち、食の伝承に関する実態を捉えようとする場合は、細かな意識調査とその背景にある両親との関係など実態調査を系統立てて調査し長い目で観なければ解析は困難であると考えられる。

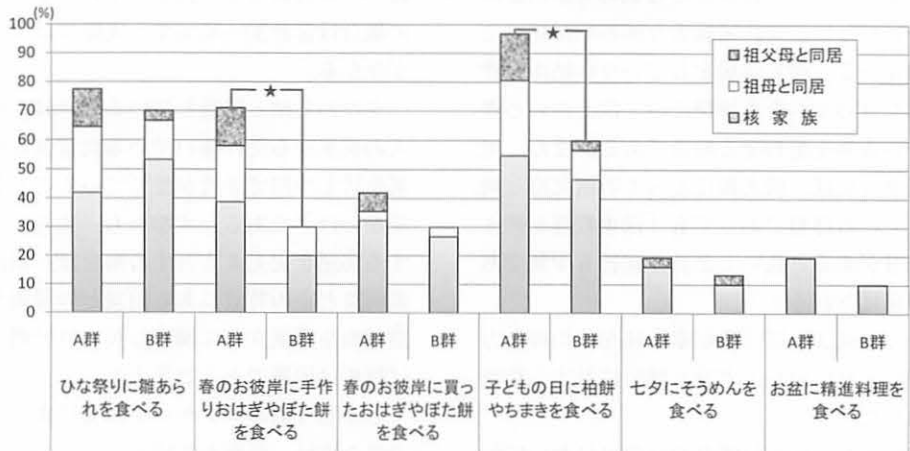
しかし今回のアンケート調査によって確認できた事は、母親から娘へというルート of 強さは封建制の強かった戦前の場合とはあい反して、姑から嫁へという食の伝承を上回るこの確実性は捉えられたのである。すなわち核家族化が進んだ「現代の家庭生活」の一側面を強く受け止めざるを得ないという事実を思い知らされる結果であった。

つぎに年中行事を支えるのも家族的な家庭生活、地域生活ではなく、より社会・経済的であり、食に関わる伝承を支えるのは、地域の商人であり、その消費者であるという側面も見逃す事はできない。

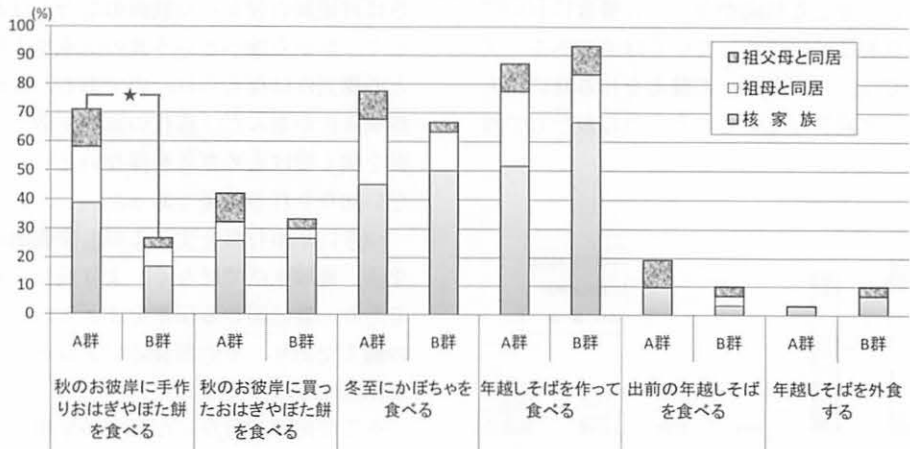
そこで同時に行なった日本の年中行事に伴う行事食の伝承に関する調査結果を解析してみることにした。



(1) 1~2月における日本の行事食



(2) 3~8月における日本の行事食



(3) 9~12月における日本の行事食

図5 行事食に関するアンケート調査結果 ★: p < 0.05

3. 行事食に関する実態調査結果

年中行事に伴う「食べもの」についてどのような形で用意し、各行事を実施しているか否かを質問用紙に記入する形式で調査し、回答された結果を、図5の(1)～(3)に示した。

すなわち、2010年現在に対して約20年ほど遡った1989年の日本の主な年中行事に伴った「行事食」に関する調査結果を並列比較したのが図5である。

(1) 1～2月に行う日本の行事食について
お正月に雑煮を食べる習慣は、20年前も現在と変わらず90%以上の家庭で行われている。

さらに、80%以上が手作りのお節料理である。既製のお節料理については、近年特に増加傾向にあるが20年前との有意差は認められない。しかしネット販売による購買の影響はこれから益々大きくなるのではないかと考えられる。家族形態や年齢構成から考えても、多くの家庭にとって、自宅で原材料から調理する場合の無駄を考えると、妥当な社会・経済事情であろう。

成人の日の小豆粥に関しては、丁度家族に成人する子が居るか否かの条件付解析ではないため偏った回答であり、これは不確かである。

節分の日の豆まきは近年では家庭から屋外に出て派手に行われる傾向もあるが、現在は核家族であっても63%の実施が認められる。すなわち、家庭生活に定着している年中行事の一つであることは明らかである。この数値にも惑わされる次第である。

1月から2月にかけての、より日本的ないずれの行事食においても20年間の有意差は認められなかった。

(2) 3～8月に行う日本の行事食について
ひな祭りに雛あられを食べる習慣は、女子を含む家族を対象としているためか、割合に多いことが分かる。これも必然的な結

果であろう。一方、5日の子供の日の柏餅や、ちまきを食べる習慣においても20年前は殆どが食べていたが、現在は全体の6割だけである。

ほた餅を食べる習慣がある「彼岸」では20年前の春は手作りが70%を上まわり、店から買っている場合を含めると先ずは全家庭で食べられていることが見てとれる。しかし現在は、その半分以下となっている。

以上5月から8月までの日本の主たる行事食の行動で有意な減少を見せられたのは「春の彼岸」のおはぎやほた餅と「子供の日」の柏餅やちまきなどの行事食の減少であった。

(3) 9～12月に行う日本の行事食について
この20年間における変化で減少という形で有意差が明らかになった行事食とは、やはり前項(2)の結果と同様、秋のお彼岸のおはぎやほた餅を用意して食べる習慣であった。その他の行事食においては大きな変化は見られなかったのである。

現在は和菓子の店より洋菓子の方に、足が向く傾向なのであろうか、と懸念される。また、餅菓子類は本来家庭で作る物というイメージが強いのもかもしれない。

その他の、冬至のカボチャや年越しそばについては、まだ各家庭で生かされている事が分かった。

IV. まとめ

核家族化が今もって進み、食料供給の面では国内自給の問題はさておき、飽食日本の文化的な側面を一部調査し、20年前と現在を比較してみたが、余りにもお粗末な食文化変容の一面を突きつけられた気持である。戦時中生まれの著者は今日、平成時代になって食習慣の伝承を学生やそのご家族に忘れないでほしい、もう少し意識していただきたい、という気持ちで調査を実施したが残念ながら以上の様な結果であった。

予想どおり、厳しいものであった。敢えて述べるとしたら、核家族化した家庭生活に対して食生活教育の側面から女子大に学ぶ学生に「日本の食文化を祖母および母親から受け継ぐ」という認識と、そのための手法を身につけさせる事が今さらながら大切な課題となっているのではないかと考える。「行事食を教授してくれる教室がほしい」と言う母親達の声もあったことを考えると、小・中学校の家庭科の授業においても取り上げるべき「家政学の課題」ではないだろうか。

以上、核家族化が今もって進み、三世代以上の家族構成での家庭生活が極めて少ない現状である。すなわち、以前のように新しい家族の一員となった息子の妻への食文化の伝承行動は、極めて希薄でかつ期待できないのかも知れない。なぜなら、娘をもつ母親が「娘に直接的に、我が家の味を伝えたい」と願い、さらに一方で「行事食を教授してほしい、そのような教室が欲しい」と回答しているのであるなら、これは「行事食」を大切にしたい、という気持ちを十分に抱いているにもかかわらず、母親自身が、すでに家庭生活の外側から学ぼうとしている事を示している、と受け取らざるを得ない実態である。例えば、バレンタインデー、ハローウィン、クリスマスなどの行事についても、同時に

調査し、韓日家政学会にて発表した。これらは盛んになるばかりである。一方、昭和初期迄の日本の食習慣は、家庭外で支えられて辛うじて行われている実態が目につく結果であった。

乳幼児の教育を考えるに当たって、核家族構造より拡大家族構成の方がベターだと叫んでも、従来の嫁・姑の家庭生活は相当な矛盾を引きずって来ているのである。子どもを育てる家庭生活について考える際、これは大きな課題ではないだろうか。本報は「行事食」の側面から母親世代の今と、約20年前とを比較しただけのものであったが、その中で、食習慣の形成と伝承において、子ども達への食教育の必要性と家政学が支えるべき範疇が多少なりとも確認できる調査結果であったことを、あえて、ここに記しておくこととする。

V. 参考資料

- 1) 「年中行事から食育」の経済学：佐々木輝雄著（筑波書房）
- 2) 日本の食生活全集「聞き書 各県の食事」：（農文協）
- 3) 松岡明子・黒澤美智子・鷺見美智子「食生活と家庭生活習慣の伝承に関する研究」第5回韓日家政学シンポジウム（於ソウル、H.2年8月）